

「女性史」としての *The Years*

島 岡 晃 子

は じ め に

ジョルジュ・デュビイとミシェル・ペローが西欧の女性の歴史をまとめた『女の歴史』に数回 Virginia Woolf の名前が登場している。最初に見られるのは「『女の歴史』(Ⅱ中世, Ⅲ十六—十八世紀)に関する考察—女性史, ジェンダー史の考察—」というテーマでジアンナ・ポマータが論じている部分である。それは、わたしたちが今論じている「女性の社会的生活の事実が資料として残されていない」という問題を Woolf がすでに *A Room of One's Own* で問題にしているというものであった。(デュビイ&ペロー (編), 1996: 30-31)

また彼女が『女の歴史』を考察した結論を以下のように述べている。

…女性の社会史に関して20年間にわたって集中的な研究がおこなわれてきたにもかかわらず、やはりこれらの著者の編者たちは、女性たちが置かれている状況についての論考よりも、女性たちに関する男性たちの言説についての論考を集めるほうが容易だと判断した、ということです。わたしたちは、ヴァージニア・ウルフが60年前にそうだったと同様に、過剰なまでの紋切り型と、事実の欠如に直面しているのです。

(前掲書: 34)

そして彼女は「…女性たちの過去の生活についての事実を掘り起こしに行こうという、ヴァージニア・ウルフのきわめて道理にかなった呼びかけ

を繰り返したいと思います」(前掲書: 35) と述べている。その次に、Woolfに触れているのはビエール・ブルデューの「『女の歴史』に関する覚書」であり、そこで彼は *To the Lighthouse* が Woolf のフェミニスト的な著作よりも如実に男性支配の象徴的な基盤とその支配が男性自身に及ぼす影響を明らかにしていると述べている。(デュビイ&ペロー (編): 76-77) そして男性支配が、男性だけでなく女性の知覚の概念まで支配していることを提示し、女性が知覚の対象ではなく主体になるにはどのようにしていくべきかを問題にしている。またその問題への彼の回答は以下のようなものだった。

女性史を綴ろうとする女性の歴史家は、かの女自身の無意識と、かの女が歴史を綴る対象である女性たちの無意識を探求することを明確な企図とし、ヴァージニア・ウルフのように行動しなければなりません。ヴァージニア・ウルフは、かの女のフェミニズム的な文章が扱っていない女性的な物の見方のもっとも深い心理を、『灯台へ』において、エクリチュールの作業にもとづいて明るみに出したのです。
(前掲書: 80)

以上のようにポマータは Woolf の歴史への先見性そしてブルデューはその思考の深さと柔軟さそして想像の豊かさを高く評価している。

そこでこの論文では Virginia Woolf が「女性史」を女性の視点でとらえ、小説 *The Years* をその新しい女性の視点による女性史として考えることは可能であるかどうか考察する。

I 女性史とはなにか

…入手可能な歴史的「事実」が圧倒的に不在であるとき、男仕立ての書かれた「正史」の背後に、いかに女にとっての「もうひとつの現実」

を再構成するか一七〇年代以降、第二波フェミニズムのもとで成立した新しい女性史の試みは、この課題に答えることだった。(上野, 1998: 13-14)

西欧のフェミニズムの流れから日本のフェミニズムが起ったのではなく、日本は独自にその運動を始めたと言われているが、1970年頃から起こった世界的なフェミニズムの活発化は日本の女性にも「女性史」に対する時期を持たせた。(上野&趙韓, 2003: 292)「女性史」がどのように定義されるのかは「女性史」を書き進めながらも議論され続けてきた。西欧でも日本でも「女性史」はこうであるというものはなく、常に点検、批判されそして反省してきた。例えば日本では80年代以降の女性史の動向を上野千鶴子が「反省的女性史」と表現し、女性史家が著名なフェミニストの生き方や作品を点検し注意深く見てみると批判すべき点が多くあり、以前までの絶対的評価が紋切り型で感情に任せたフィルターに汚染されたものであったことが明らかになってくる。(上野, 1998: 30)

Virginia Woolf に対してもフェミニズムの広がりと同時に彼女自身の階級による限界あるフェミニズム的発言に攻撃が集中した。その代表的なものに Alice Walker の発言がある。

Virginia Woolf, in her book *A Room of One's Own*, wrote that in order for a woman to write fiction she must have two things, certainly: a room of her own (with key and lock) and enough money to support herself.

What then are we to make of Phillis Wheatley, a slave, who owned not even herself? . . . [H]ad she been white, would have been easily considered the intellectual superior of all the women and most of the men in the society of her day. (Walker, 1983: 235)

彼女は Woolf の物を書く女性は自分の部屋（自分の領域）を持ち経済的にも自立すべきであるという主張は白人で Woolf と同じ階級の女性にしか当てはまらないと述べている。また Woolf がイギリス女性作家の状況を問題にしたように Walker も黒人女性作家たちが直面してきた状況を問題にしている。それは Woolf が思いつきもしなかった事実であり、黒人女性たちは自分自身でさえ所有できずそのため健康状態も悪かったが、彼女たちはそのような状況の中でも創作活動を止めることはなかった。(Walke, 1983: 235) Walker はこのように述べながらも彼女の講義に Woolf の *A Room of One's Own* を取り上げる理由を以下のように記している。

Also Kate Chopin and Virginia Woolf — not because they were black, ... but because they were women and wrote, as the black women did, on the condition of humankind from the perspective of women.

(前掲書: 260)

Walker がここで Woolf を用いるのは Woolf が女性の視点でその状況を描いているからであるが、多くの社会学者や女性史家が Woolf を高く評価する点もここにある。なぜなら「女性史」にとって重要なのは「女性」ではなく「女性の視点」であるからだ。例えばミシェル・ペローはこう明言する。

…女性史という新しい分野をつくるのが、問題なのではない。もしそんな女性史なら、それは波風の立たぬ譲歩にすぎず、女性たちはそこで、あらゆる矛盾を隠れみのにして、気ままに羽をひろげてみるだけになろう。そうではなくて、男女両性の関わり方の問題を中心軸に据え、歴史を見る眼差しの方角を変えることが、もっとずっと重要なのである。要するにこれがなされなければ、女性史はあり

えないのである。

(ペロー (編), 1992: 31)

またこれまで女性について書かれてきたものの中で女性の視点で書かれたり考慮されたりしたものは少なく、書かれた女性は男性の理想像であったり卑下された女性像であった。(前掲書: 23) またビエール・ブルデューは女性が女性史を書く際に本当に女性の視点を用いることが可能かどうかについて疑問を投げかけ、そしてそのためにはどのように行動していくべきかを提言している。

女性史を書く際に、こうした象徴的暴力の効果を保留することができるでしょうか。男性支配は女性たちに関する研究(それが男性によるものであれ、女性によるものであれ)にたいしても影響を及ぼさないでしょうか。(デュビイ&ペロー (編), 1996: 78)

…歴史家は男性も女性も、おのれ自身の物の見方を批判的考察にゆだね、象徴的暴力によってかれらに課されているかもしれない前提、女性たちの物の見方に接近するのをかれらに禁じているかもしれない前提を問いなおすことができるようにならなければなりません。

(前掲書: 78-79)

ブルデューはまず自分の物の見方がどこから来ているのかを知る必要性を説いている。そうでなければ自然と支配的な視点(これまで行われてきた男性支配による視点)を男性も女性も採用して物を見てしまうだろう。そして女性史はただ主流の歴史に付け足された付録のような歴史になるだろうと確信している。そしてブルデューは男性支配が女性の知覚まで及んでいるとすれば、女性的な物の見方というのはみずから見極められない、従属的な物の見方だということになると述べている。(デュビイ&ペロー (編), 1996: 78) そしてそのような支配された視点のまま女性史を

書くと女性たちの物の見方を作り出している本質的な部分を無視する結果になると指摘する。彼は女性の物の見方を作り出す本質的な部分の例を以下のように挙げる。

…歴史の些細な側面（例えば銃後から、死亡通知書をとおして見られた第一次大戦など）やひとびとの心に映し出された歴史（カピリアの譬喩のよれば女性は月です）、さらには私的なものや家庭的なものから見られた公的なものなど……（前掲書：79）

確かにいま以前に比べて歴史に埋もれた女性たちの声がわたしたちにも聞こえてくるようになった。例えば日本や韓国で従軍慰安婦が問題にされたのも女性の視点で歴史をみたことから始まる。（上野，1998：14）もしこれまでの支配的な視点で「従軍慰安婦」を見ていたならばそれは問題とされなかった。また憲法改正やイラクへの自衛隊派遣などを女性の視点（私的で家庭的な視点）で見えていくとどんな大義名分があったとしても自分の子供達が言葉も通じない異国の地に生命の危険を犯してまで行かなければならないのか。戦争に「聖戦」があるのか。以上のような多くの声が上がると思われる。

II 女性の視点と Woolf

歴史への Woolf の関心は *Mrs. Dalloway* の Clarissa の *Baron Marbot* の読書（34）や現代歴史の知識がすばらしいと言われる Miss Kilman そして *Orlando* や *The Years* などの作品によってうかがうことができる。Woolf の歴史に対する姿勢は、*The Years* の原型と変えられる 'Novel-Essay' *The Pargiters* の First Essay によって明らかになる。

This [Both my aims in this paper... require some few pages of historical preface] is obvious because we cannot understand the present if we isolate it from the past... We must become the people that we were two or three generations ago. Let us be our great grandmothers.

(Woolf, ed. Leaska, 1978: 8)

彼女はわたしたちの歴史を知ることは今のわたしたちを知ることと同じであり、わたしたちの祖母が未来のわたしたちの姿であるということである。*The Pargiters* では 'smiling, silent, attentive, pouring' な (前掲書: 114) Kitty が Miss Craddock に、歴史を学びままでのやり方に疑問を抱き始める。そして彼女は 'she had been trained as a woman,' (前掲書: 151) という認識に至った。彼女は歴史を勉強することを通じて今の自分の状況、過去や未来へと考えを広げ自分の存在そして女性という立場を深く考えるようになったのではないだろうか。そしてその反対に男性は学校教育を受け歴史を学び、歴史はいつも自分たちの物であるという感覚できないくらい歴史と同一化している。歴史を勉強できなかった女性の目は無視されたまま男性の男性による歴史が書かれ続けてきた。Kitty が勉強した歴史も男性による歴史であったはずである。もし Kitty がそのことに疑問を持つとしたら「この (男性による) 歴史と自分は本当に繋がりがあのだろうか」ということだろう。Woolf は *A Room of One's Own* で女学生たちに歴史を振り返りながら、歴史に女性が含まれていないという問題を提起している。

...one is held up by the scarcity of facts. One knows nothing detailed, nothing perfectly true and substantial about her. History scarcely mentions her. (Woolf, ed. Barrett, 1993: 40-41)

What one wants... is a mass of information; at what age did she

marry . . . ? All these facts lie somewhere, presumably, in Elizabethan woman must be scattered about somewhere, could one collect it and make a book of it. (前掲書: 41)

そして「女性史」という概念さえ一般的ではない当時に Woolf は次のような言葉を用いて「女性史」を書くよう示唆した。

It would be ambitious beyond my daring . . . to suggest . . . that they should rewrite history, though I own that it often seems a little queer as it is, unreal, lop-sided. . . (前掲書: 41)

Woolf は “rewrite history” という表現でこれまでの歴史を書き換えることの必要性を訴えた。また *The Pargiters* を着想したとき彼女は日記にこう記している。

I have this moment, . . . conceived an entire new book — a sequel to a ^(sic) Room of Ones Own — about the sexual life of women. . . (20 Jan. 1931) (Woolf, ed. Bell & McNeille, 1982: 6)

彼女は ‘women’s history’ という言葉を用いてはいないが「女性史」という表現が一般的になった今日でも通用する概念は持っていたようだ。

また Woolf は最初 “Essay-Novel” として *The Pargiters* を1932年11月に書き始めたが、1933年1月にはその構想を捨て、彼女は小説 *The Years* として1937年に出版した。そして ‘lumping the Years & 3G[uinea]s together as one book . . .’ (20 June 1938) (Woolf, ed. Bell & McNeille, 1984: 148) と日記に記されている *Three Guineas* は次の年に出版された。*Three Guineas* はブルームズバリーの仲間からも拒絶され彼女の伝記を書いた Quentin Bell は「女性の権利の議論がなぜファジズムや戦争に結びついて

いるのか理解できない」(Bell, 1972: 205) と否定的な評価を下し同じフェミニズム的作品でも *A Room of One's Own* ほど高い評価を受けていない。また Sharon L. Proudfit は Woolf の感情的な論調を次のように述べている。

In *Three Guineas* Virginia Woolf assumes a voice which is unnatural to her, the masculine voice of the fighter she adhor.

(ed. McNees, 1994: 150)

しかし *Three Guineas* は甥の Julian Bell がスペイン戦争へ行くことへの狼狽、後悔そして怒りなど複雑な思いから書かれた私的な作品であるとも言える。(Woolf, ed. Barrett, 1993: XI) Woolf は1937年7月にスペインで亡くなった Julian Bell の 'memoir' を残している。そこには Julian の父である Clive と母 Venessa (Nessa) の息子への思いが読みとれる。

...he [Clive] added, But Julian is very cool, like Cory [Clive's brother] & myself. It's spirited of him to go [to Spain], ... If Woolf think I said, But it's a worry for Nessa. (Bell, 1972: 256)

戦争に行き戦えることを誇りに思うのは支配的(男性的)な知覚の概念であり、日本においても第二次世界大戦時にフェミニストと思われていた著名な女性たちでさえ「戦場で戦って死ねない悔しさ」を叫び女性の知覚さえ男性に支配されていたことに気づいてはいなかった。(上野, 1998: 35)しかし彼らの場合はそうでなく、母 Venessa は息子を心配し、男性的な意見を述べていた Clive も Julian の死後平和主義の立場をとるようになった。

またファシズムに対してブルームズベリーグループの Dancan Grant と Quentin Bell は 'the classic outsiders' position (Woolf, ed. Barrett, 1993:

XI)'をとり続け一つの抵抗の姿勢を示していた。一方 Woolf は *Three Guineas* で女性の教育と女性の経済的自立が戦争を防ぐことにつながると書かれているが、女性の視点の再構築とその具体的基盤が戦争を防ぐことにつながると言い換えれば理解しやすいのではないだろうか。なぜならブルデューが先に述べているように「女性たちにとっても知覚の対象にすぎない女性たち」(デュビイ&ペロー (編), 1996: 79)であることを女性が認識し、思想を形成し言語化する方法を学ぶことが女性の教育であり、女性の思想に従って具体的行動に移すための手段が女性の経済的自立であると考えれば、そこから生まれた女性の視点は歴史を変えてしまう可能性があるかも知れないからである。これまで歴史に埋もれてきた女性の視点が明らかになり歴史を変え、人々の歴史認識まで変化させれば人はそこから学び、戦争を防ぐことも可能になるかもしれない。

また Woolf は *A Room of One's Own* で次のように書いている。

It [the mind] can think back through its fathers or through its mothers, as I have said that a woman writing thinks back through her mothers. (Woolf, ed. Barrett, 1993: 88)

... the very first sentence that I would write here. . . is that it is fatal for anyone who writes to think of their sex. (前掲書: 93-94)

これらはブルデューが述べてきた「支配的な知覚の概念」を男女問わず採用しているということを明確に表現している。なぜなら物を書く女性は母を介して思考することは母の物の見方を娘は受け継ぐということであり、その母の「みずからを見極められない、従属的な物の見方」を娘は受け継いでいることを意味する。また Woolf は以下のようにも述べている。

... she wrote as a woman, but as a woman who has forgotten that she is a woman, so that her pages were full of that curious sexual quality which comes only when sex is unconscious of itself.

(Woolf, ed. Barrette, 1993: 84)

女性が自分が女性であることを忘れるとは知覚にまで及んだ「女性の身体に押しつけられた女性の物の見方と性差による分業」(デュビィ&ペロー (編), 1996: 78) を停止させることであり、自分が女性であることを意識しないときにだけこれまでにない性質のものが満ちてくるのである。また “that curious sexual quality” とは「女性的な物の見方を取り去った [両性的な] 性質」と考えられる。

III *The Years*

では Woolf は支配的な物の見方を取り払った女性の視点で小説 *The Years* を書き得たかどうかを考えていく。*The Years* は ‘saga-approch to the life of women from the Victorian period to the late 1930s’ (ed. McNees, 1994: 150) と述べられているように1880年代から1930年代までの女性たちの人生を中心に書かれている。またその彼女たちの人生は「世代の上昇と凋落の社会の歴史的変転ないし没落 (坂本, 1978: 247)」に左右され、女性たちはその波の中に自らの人生の意義を希求していた。しかし Hoffmann は *The Years* の manuscript 研究から *The Years* が小説として失敗している理由を分析している。

The failure of *The Years* as a novel is mainly the result of Virginia Woolf's attempt to free herself from the limitations of the externality of the family chronicle by using the internality of personal vision to portray the continuity of the years. (ed. McNees, 1994: 146)

彼は歳月の経過を描写しようと登場人物の内面を用いた結果、世代の移り変わりの明確な事実を書き表せなくなったためであるとしている。また Jeri Johnson は ‘... the long *MS*, a text which stands generically half-way between *The Pargiterd* and *The Years*’ (Woolf, ed, Johm, 1998: XVI) を用いて *The Years* 成立の過程を考察し、次のように述べている。

... *The Years* is much subtler, more complex, more difficult work than *The Pargiters* and the *MS* in virtually every way ... [I] t [*The Years*] looks startlingly like a ‘traditional’ novel. It has dates, characters, takes place in a real world of ‘history’ which is seen to have real, if at time elusive, effects. And yet, read as a ‘traditional’ novel, it disconcerts. The critics have decided that, as Victoria Middleton summarizes their views, *The Years* is ‘an ugly and poorly written novel, at best misfire’.

(Middleton, 1977: 160) (Woolf, ed. Johnson, 1998: XX)

小説として不出来であると烙印された *The Years* であるが、肯定的にとらえる批評家は「世代の上昇と凋落の社会の歴史の変転ないしは没落」というテーマを掲げ、食事の場面や家財道具への詳細な言及に配慮し Woolf の小説における工夫を読み解けば小説の流れが比較的理解しやすくなるのではないだろうかと述べている。(坂本, 1978: 246-248)

しかし小説として *The Years* をとらえるのも一つの手であるが、*The Years* を「女性史」として読むのはどうであろうか。Woolf の文筆生活に連続性を見いだすとき、*The Years* と「女性史」は奇妙に重なり合うのかもしれない。*The Years* が「女性たちと歴史的事実との関わりを真の女性の視点で新たに書き換える」ことを目的としたのなら、その作業自体が意義のあることではないだろうか。そして Woolf は ‘Fiction here is likely to contain more truth than fact.’ (Woolf, ed. Barrett, 1993: 4) ‘... I prefer

... to put it [my own suggestion] in the form of fiction,' (前掲書: 102) と述べたことがあるように *The Years* も小説の形式で書いたと思われる。また Woolf が最も書き換えたかったのは「他の何よりも強くフィルターがかかっている」(ペロー (編), 1992: 23) 女性へのまなざしではないだろうか。つまり Woolf は *Mrs. Dalloway* でロンドンの Big Ben を男性支配の象徴に用いたのと同じように、'1880' '1917' そして 'present day' など断面に男性 (支配) の視点からだけでなく女性の視点で女性が何を考えどう生きたかを描こうとした。その顕著な例は「1880年」の章だろう。場面は Colonel Abel Pargiter (父) が仲間と一緒にいるが、病気の妻や家庭のことを考えるうちに恋人の Mira に会いに行くところから始まる。その時彼は '... Mira at least would be glad to see him.' (5) と考えているが、彼の考えと Mira の思いが食い違っていることに彼は気づかない。

... [S] he was... really glad to see him, he thought. ...

The old boy was out of spirits today, she [Mira] felt. In that mysterious world of clubs and family life of which he never spoke to her something was wrong. He had come before she had done her hair, which was a nuisance. But her duty was to distract him. (6)

Colonel A. Pargiter は Mira が会いたがっていたと信じているのに対して Mira は時を考えずに現れる彼を内心困りながらも、彼に気晴らしさせるのが自分の仕事だと割り切って彼を受け入れる。ここで男性の思い描いている女性とその女性の思いが違うということが、明確に伝わってくる。これは *To the Lighthouse* の Mr. Bankes や *Tansley* の Mrs. Ramsay への思いと重なる部分がある。そして父と Mira の関係は彼の死後突然 Martin の意識を通して再び言及される。

His father had lied — after his death they had found letters from a woman called Mira tied up in his table drawer. And he had seen Mira — a stout respectable lady who wanted help with her roof. (163)

ここでも Martin は見たことのない父の恋人 Mira を ‘a stout respectable lady’ だと想像している。しかし実際の Mira は湿疹を患った犬をかわいがり、鏡に映った自分の姿に ‘What a dreadfully untidy girl you are!’ (6) と叫びたくなるような女性である。Martin の女性像と現実の Mira の間には大きな隔りがある。

また1880年にはその後母の死が書かれているが、四人の娘のうち Delia と Eleanor の視点からその母の死についての描写がある。そして ‘sentimental’ に Mrs. Ramsay の死を描いた *To the Lighthouse* と違いその母の描写は冷静、沈着なものである。

She [Delia] longed for her to die She tried to whip up some feeling of affection, of pity But the scene melted as she tried to look at it. (16)

There lay her mother; in that coffin — the woman she had loved and hated so.

. . . She saw Morris and Eleanor side by side; their faces were blurred; their noses were red As for her father he was so stiff and so rigid that she had a convulsive desire to laugh aloud. Nobody can feel like that, she thought. (63-64)

Delia は母の葬儀の間家族の行動を観察し、自分と同じように誰も悲しんではないと感じていた。Eleanor もまた ‘. . . until Mama dies (15)’ と内心思っている。*The Years* では母と娘のつながりが見られず、母は

‘this borderland between life and death for ever (16)’に生き ‘Where am I? (17)’と叫び、会話もできなくなっている。それは母の世代の女性の立場を象徴的に表わし女性の権利が認められず、教育も男性と同じほどには受けられない事実をうけている。そして Mrs. Ramsay がヴィクトリア朝的女性を表していたにもかかわらず、死の後でも夫や友人に思い出されているのに対して *The Years* の母はただその死を淡々と描写され、さらに家族がその母に敵意をもっているかのように書かれている。しかしそれは *The Years* が男性の抱く女性像ではなく真の女性の姿を描こうとしているからであり、Delia, Eleanor の母への冷静な思いや Mira に代表される対象を観察する冷ややかな視点もまた女性のものであるのだ。

おわりに

Virginia Woolf が *A Room of One's Own* (1925) で ‘to rewrite history’ を唱えたが、フェミニズムの動きが活発化した1970年代になりその運動から「女性史」が書かれるようになった。フェミニズム拡大と深化から Woolf のフェミニズム的発言と彼女の小説とのギャップそして白人ブルジョア階級に生まれた Woolf 自身の立場からのフェミニズム的発言への限界など多くの批判を受けた。しかしその批判のなかでも彼女の先見性のある歴史への視点、そして人の内面を掘り下げる創造力と感受性は常に時代の先にある。

The Years はファシズムの勢いがイギリスを巻き込もうとする頃に出版され、女性の権利を次々と押さえ込むファシズムへの抵抗の書でもあるだろう。例えば70歳を過ぎている Eleanor は夕刊に載っている Benito Mussolini の写真にさえ悪態をついている。

‘Damned —’ Eleanor shot out suddenly, ‘bully!’ She tore the paper across with one sweep of her hand and flung it on the floor. (242)

これは小説形式の「女性史」として *The Years* を読むとき Eleanor のファシズムへの態度も女性の視点からの第二次世界大戦の記録として残るだろう。歴史と女性たちの関わりだけでなく男性支配の視点から描写された女性像ではなく「フィルター」のかかっている女性自身の意識を *The Years* は書き綴っているのではないだろうか。そして Woolf の歴史の探究そして挑戦は遺作 *Between the Acts* に続いている。

参考文献

- Allan, Tuzyline Jita. *Womanist & Feminist Aesthetics: comparative review*. Ohio University Press, 1995.
- Bell, Quentin. *Virginia Woolf: A Biography*, 2vols. Hogarth Press, 1972.
- McNees, Eleanor (ed.). *Virginia Woolf Critical Assessment*. Helm Information, 1994.
- Middleton, S. Victoria. 'The Years: "A deliberate failure"', *Bulletin of the New York Public Library* 80. 2, 1977.
- Walker, Alice. *In Search of Our Mother's Gardens*. Harcourt Brace Javanovich, 1983.
- Woolf, Virginia. *A Room of One's Own & Three Guineas*, ed. Michell Barrett. Penguin, 1993.
- . *Mrs. Dalloway*. Penguin, 1992.
- . *The Years*, ed. Jeri Johnson. Penguin, 1998.
- . *To the Lighthouse*. Penguin, 1992.
- . *The Pargiters: The Novel-Essay Portion of 'The Years'*, ed. Mitchell A. Leaska. Hogarth Press, 1978.
- . *The Daily of Virginia Woolf*, 4vols, 1982.
- . *The Daily of Virginia Woolf*, 5vols., ed. Anne Olivier Bell and Andrew McNeillie. Harcourt Brace Javanovich, 1984.
- 上野千鶴子. 『ナショナリズムとジェンダー』. 青土社, 1998.
- 上野千鶴子&趙韓惠浄. 「talking at the Edge 境界で語る(2)」『世界』2003-11. 岩波書店, 2003.
- 坂本公延. 『ヴァージニア・ウルフ小説の秘密』. 研究社, 1976.
- ジョルジュ・デュビイ&ミシェル・ペロー(編). 小倉和子(訳), 『「女の歴史」を批判する』. 藤原書店, 1993. (=George Duby & Michell Perrot, ed.. *Femmes et historie* Plon)
- ミシェル・ペロー(編). 杉村和子, 志賀亮一(監訳)『女性史は可能か』藤原書店, 1992. (=Michell Perrot, ed.. *Une Histoire des Femmes Est-Elle Possible?*)